

講座Ⅲ「卒業生に学ぶ 難聴」

軽度・中等度難聴児の指導にあたって ～自身の経験から感じたこと～

田島 秀樹さん

はじめのいっぽにご参加の先生方、こんにちは。東京都立大塚ろう学校で特別支援教育コーディネーターをしている、田島秀樹と言います。軽度・中等度難聴児の指導について、私の経験から感じたことをお話させていただきます。内容は3点です。

- 自己紹介

私は先天性の聴覚障害で、感音性難聴 高音急墜型という種類の難聴です。保育園から大学までは、聞こえる学校で学びました。小学校5、6年の時には、難聴指導学級に通級していました。補聴器の装用は、社会人になった時(23歳)からでした。そして現在、都立大塚ろう学校に勤務していて、特別支援教育コーディネーターとして校内支援を担当しております。私の聴力は、平均聴力 右：50dB 左：52dB (感音性難聴〈高音急墜型〉 軽度～中等度)です。左右差はほとんどありません。低音域だけ見ると軽度難聴ですが、高音域を見ると中等度難聴のため、アンバランスな聴力になっています。また、私の聴力だと子音の聞き取りに困難さがあります。そのため、発音が不明瞭になったり、カ行、サ行、タ行は今でも聞き取りが曖昧になることがあります。

- 難聴を受容するまで(難聴で困ったこと)

保育園は、地元の保育園に通いました。聞こえにくいということで、困った経験はありませんでした。自分の聞こえ方が当たり前だったため、実際には、聞こえていないことに気付いていなかったのです。小学校入学する前の就学時健診の時に、難聴が発見されました。先天性の難聴だろうという事でしたが、3歳児健診の時には発見されず、就学時健診の時に分かりました。その後すぐに、地域の病院を受診し、通院が始まりました。

小学校は、地元の公立学校に通いました。座席はいつも一番前で先生の目の前でした。5年生の時に、通っていた学校にことばの教室ができたため、校内通級をすることになりました。今では考えられないと思いますが、学校でポケット型の補聴器を購入してくださいました。しかし、私の耳には合わず着けることはしませんでした。装用しなかった理由には、自分だけ補聴器を着けることが恥ずかしいという気持ちもありました。今まで補聴器を付けていなかったため、「今の聞こえの状態で大丈夫だ」という思いもありました。

小学校時代に困ったことを思い出してみました。子音が聞き取りにくいと、聞き間違いがとても多かったように思います。聞こえたように言葉を覚えてしまい、文字にすると誤っていたということがいくつかありました。社会科見学等、バスで移動する際は、先生や友達の話が全くと言っていい程、聞き取れなかったです。

小学校時代、困ったときの自分なりの対応を思い出してみます。まず、聞き間違いの多さや、周囲の会話についていけないことに対しては、聞こえた言葉や音の方向を向き、聞こえた単語から内容を予想するようにしていました。そのため、話を

間違えて捉えていることが多く、話がズれることも多くありました。みんなが笑っていて自分だけ笑えないときに、友達に確認するということがありました。内容を分かっていなくても、とりあえず笑ってやり過ごすということも多くありました。授業の時に聞こえなくて困ったことは、話し合い活動でした。だれが発言し、何を言っているのかが全く分かりませんでした。そのことを解決するため、自分から司会に立候補して、自分のペースで話し合いが進められるようにしました。話す人を決めることができるので、誰が話しているか分かり、口形も見やすく、有効な方法だったと思っています。授業を受けていると、知らない言葉が出てくる場面がありました。そのような時には、教科書から探す、後の話を聞きながら予想するといったことをしていました。囁き声や内緒話が聞き取れないため、授業中の物の貸し借りの場面で、相手が何を貸してほしいのかを聞きとることができず、とりあえず消しゴムを渡して、反応を見るということをしていた思い出があります。体育の時ですが、笛の合図が聞こえませんでした。校庭やプールでは、先生の話す内容がほとんど聞こえませんでした。そのため、隣の人動きを見て行動を合わせていました。

中学校には難聴学級が無かったため、通級はしませんでした。座席はいつも先生の前で、補聴器は使用していませんでした。無意識に先生の口形を見ながら、話す内容を予想することがありました。この頃になって、周りとの違いに気付き始めました。発音の不明瞭さを周りから指摘されることもあり、電子辞書で発音の仕方を調べて練習することもありました。部活動は、バレーボール部に入部しました。笛だけでなく、手での合図もあったため、特に困ることはありませんでした。1番困ったことは、英語の授業でした。私は子音が聞き取れないため、リスニングでは全く聞き取ることができず困りました。英単語をいくら覚えても、聞き取れるようにはなりません。高校受験の際は、配慮を受けられることを知らず、何の配慮もなく受験しました。リスニングは難しいため、筆記で点数を取ろうという気持ちで受験しました。教員になって初めて、都立高校の受験では合理的配慮を受けられるということを知りました。合理的配慮を受けられることは、先生方にはぜひ知っておいていただきたいです。

高校は地元の公立高校に進学しました。聞こえについての支援をしてもらった記憶はありません。むしろ、聞こえにくさがあることを周りには一切公言していませんでした。聞こえないことを恥ずかしい事と思っていました。自分の中では聞こえているという思いがあり、障害を受容できていませんでした。補聴器は使用しておらず、中学校時代と同じように、無意識に先生の口形を確認していました。通っていた学校は予習が必須だったため、授業中は知っている言葉が多く、特に困り感はありませんでした。部活動は吹奏楽部に入りました。合奏の時、周りの音に自分の演奏の音が掻き消されてしまい、自分の音が聞こえず困った記憶があります。中学校時代と同じで、英語のリスニングは全くと言っていい程できませんでした。高校3年生の時、センター試験でリスニングが始まりました。1人1人に配られた機械のボリュームを最大にしましたが、分かりませんでした。マークシートだったため、適当に答えました。大学受験の時も、配慮を受けられることを知りませんでした。大学受験でも配慮を受けられるため、ぜひ先生たちは知ってください。ただし、学校生活で同様の支援を受けていることが条件になるため、ご注意ください。

大学も地元の大学に通いました。周囲には、聞こえにくいことを黙っていました。まだ、聞こえにくい自分を受容できていませんでした。補聴器も使用していませんでしたが、今思い出してみると「いつも話を聞いていないね」と友達から言わ

れることが多くありました。幸いにも、教科書やレジュメがある学校だったため、困ることはありませんでした。学校からの情報は掲示板に出されるため、それを見ることで困ることはありませんでした。このようなことから、大学生活で講義を受けていて困ったということはありませんでした。大学4年生の時に、教員採用試験を受けました。受験にあたって大学から、「難聴があることを説明しないとイケない」と言われました。「採用する側としても、どのようなときに困って、どのような支援があれば仕事ができるのかを説明してもらう必要がある」と大学から強く言われました。自分の障害について、相手に具体的に説明する力が必要なことをその時初めて知りました。

障害受容の過程について、まとめます。保育園時代は、受容どころか難聴があることにも気付いていませんでした。小学校では高学年になるにつれて、少しずつ周りとの違いに気が始めました。しかし、周りと違うことへの羞恥心や特別扱いに対する抵抗感から、まだまだ受け入れることができませんでした。中学校、高校時代は、自身の聞こえにくさについては理解していましたが、周囲に公言できず、聞こえにくさのある自分を受け入れきれませんでした。大学生になり、教員採用試験の時に、自身の障害について説明する力が必要なことを感じ、当時お世話になっていた先生に身体障害者手帳の取得を勧められ、手帳を取得しました。手帳を取ったことにより、聴覚障害がある自分を受容することができました。

- 軽度・中等度難聴の指導にあたって(自身の経験から感じたこと)
私の経験から7点お話しします。

<1>聞こえ方や聞こえにくさは千差万別である

人それぞれで聞こえ方は違います。単純に平均聴力だけで比較はできません。平均聴力は同じでも、私とは逆に低音が聞きにくい子供もいます。聞こえ方は全く違うため、それぞれの子供に合わせた対応をしていただきたいです。普段何気なく使っている言葉でも、間違えて覚えているかもしれないため、文字で示していただきたいです。

<2>難聴があっても、健聴のお子さんが体験する活動をさせてほしい

聞こえにくさがあるため配慮が必要ですが、聞こえないから経験させないということはしないでいただきたいです。

<3>難聴のある人同士のつながりを大切にしてほしい

難聴児同士のかかわりを作ることが、難聴学級の役割の1つだと考えています。

<4>聞こえにくさを学ばせてほしい

軽度・中等度難聴は、「聞こえている」と思われやすく、自分でも聞こえにくさを理解しにくいです。聞こえにくさがあることを念頭に置いて関わってほしいです。また、具体的にどのような場面で聞こえにくいのかを一緒に探してほしいです。自身が「大丈夫」「聞こえている」と思う子供もいます。子供だけでは、聞こえにくさに気付くのは難しいです。聞こえている教員から、聞こえにくい音をその都度教えていただきたいです。

<5>難聴のお子さんに支援しているように思わせない工夫があるとよい

配慮は必要ですが、難聴児にだけ支援をしていると思わせない工夫をしてほしいです。難聴児が分かりやすい支援(視覚掲示、声掛け等)は、他の子供にも分かりやす

い支援になります。

<6> 「分からない」と言える環境を作ってほしい

学校でも家庭でも、「聞こえなかったからもう1回言ってほしい」と言える環境を作ってくださいたいです。

<7> 自分の聞こえにくさを説明できる力を育てほしい

どのような場面で、どのような支援があればよいのかを具体的に伝えることができる力を育てほしいです。「できないこと=恥ずかしいこと」、「相手に支援を求めること=恥ずかしいこと」ではないことを伝えてほしいです。小学校高学年ぐらいから、自身の将来について話題していただきたいです。